
空っぽの教室

柚乃 詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空っぽの教室

【Nコード】

N3233U

【作者名】

柚乃 詩音

【あらすじ】

夏休みにもかかわらず補習。誰もいない教室と病気がちな自分に少し憂鬱になっている中でもやはり楽しいことはあるんです。

今日から夏休み。誰もが待ちに待った長期休暇に浮かれ気味になっている。なのに私は、一人学校に来ている。

まだ一学期が終わっただけだ。けど、出席日数が足りなくなっただから、補習。病気がちでなかなか学校に来ることができなかったのだから仕方ない。けれど、入学してまだ三ヶ月ぐらい。休んでいたせいで特別仲がいい友達とかはいないし、誰かを好きになるくらい周りと関わっていない。少しだけ、もう皆離れているはずの教室に入ることにさえ緊張してしまう。

「宮都、おはよう！」

担任の無駄に爽やかな数学教師が笑顔で挨拶してくる。蒸し返すような暑さの中それをまったく感じさせない涼しい表情だ。

「おはようございます」

「一週間よろしくな。なに、宮都は成績はいいんだから休んでた遅れぐらいはすぐに取り戻せる」

「忙しい中すみません。よろしくお願いします、先生」

軽く会釈する。すると先生は申し訳なさそうに頭をかいた。

「あー、悪いんだけどな、今日は会議が入っちゃってなあ。先生がつくはずだったんだけど急に、な。他の先生も手が空いてないらしくて……。だから今日はプリントして自習な。頑張れよ」

トントんと教卓でプリントの束をそろえて私に渡すと、時間を確認して急ぐように教室を出て行った。きっと会議に遅れそうになっちゃったんだ。

自分の席について、まだ見慣れることのない外の景色に目をやる。窓からは丁度グラウンドが見える。夏休み早々部活に精を出す生徒たちの姿が見えた。教室は一階だから距離も近い。

私はまだ部活も決めていない。決めそびれた、が正しいんだけれどこの時期になってから入部するのも気が引けてずるずると決めれ

ずにいた。このまま何もしないで三年間過ごしてもいいかなあ、とも思ったがせっかくの高校生活何かしたいような気もして、でも何かしたいわけでもないし……と決めかねていた。

「楽しそう」

二学期からはちゃんと学校に行って、友達作って、楽しく過ごしたいな。

自分以外は誰もいない教室に少し寂しさを覚える。

渡されたプリントに手をつけずにぼうつと外を眺めていると、開け放たれた窓から拳ぐらいの大きさのボールが飛び込んできた。

近づいて拾うと……たぶんソフトボールだ。授業で何度か使ったことがあったので分かった。その授業も、見学していた気もするが。「ごめんごめん。ぶつからなかった？ 大丈夫ー？」

ボールに遅れて短い髪を二つ結びにした女子生徒が走ってきた。

あ、見覚えある。たぶん同じクラスの子だ。

見覚えがあつたのは相手も同じだったらしい。

「椎奈ちゃん、だよ。あたしわかるかな？ 同じクラスなんだけどー」

顔は覚えてるけど、名前が浮かばない。まごついていると「気にしないでいいよ」と言ってくれた。

「椎奈ちゃん休んでること多かったからね。あんまり話してないし覚えてなくても仕方ないよ。あたしねー、優理。水貴優理ね。よろしくー」

「よっ、よろしく」

慌てたせいでつつかえて返してしまうと、けらけらと笑われた。でも、それは馬鹿にされたような不快なものじゃなくて、暖かくて心地のいい笑いだった。

「実はね。椎奈ちゃんとは前から話してみたいなって思ってたの！だからボール飛んでっちゃってラッキーかも」

はにかむ様な優理ちゃんの笑顔に、嬉しくて胸の置くがジーンと熱くなつた気がした。

色のない夏休みなるはずだった私の世界に、うつすらと明るい色が差された。

「しいーな！ 今日も来ちゃったよー」

部活の合間に、優理は毎日教室に遊びに来る。それはもう習慣のようになってからすでに一週間はたった。

呼び捨てで呼び合おうって言い出したのは優理。まだ慣れなくてちゃん付けで呼んじやう事もあるけれど、私は初めて友達を呼び捨てで呼んだ。「優理」って、たった三文字の音。でもそれを口にするたびにドキドキと心臓が跳ね回る。

「おはよー。今日も部活？」

「ううん。今日は部活は休み。でも椎奈に会いに来ちゃった」

えへへ、と声に出して優理が笑う。部活が休みの日に会いに来てくれるのは今までにも何回があったけれど、やっぱり嬉しくて私も静かに笑った。

「どーう？ 勉強はかどってる？」

「微妙。やっぱ休んでたのが長すぎたっぽい。結構この遅れは痛いよう」

今日は外から部活に意気込む生徒の声に混じって太鼓のお囃子が聞こえてくる。お祭りが近いんだ。

「あ、見て。外。サッカー部だ」

優理に引つ張られて窓際まで行つて、外を見る。

「うわあゝ、かっこいい」

「誰が？ え、どれどれ？」

身を乗り出している優理の小さな呟きを拾って、私も外の興味が向いた。

サッカー部がふたチームに分かれて試合形式で練習している。

「ちっ、違うよ！ 誰がかっこいいとかじゃなくて、その……プレーが。そう。プレーがかっこいいなって。ほら、さっきシュート決

めてたじゃん」

確かにさつき、誰かがシュートを決めた。あれって確か……。

「同じクラスの人、だよな。名前は覚えてないけど」

「うん。岩崎亮だよ。うまいよね、サッカー」

「ごによごによと小さな声で言う優理の頬は薄っすら赤い。」

「好きなんだ。岩崎」

「ちがつ！ 違うから。そんなじゃないよ、あんな口が悪くてがさつな奴……」

「必死になるあたりが怪しい」

「違うんだからあ。そういうのはなくて……ただ……ちょっと、仲

良いだけだもん」

真っ赤になつて尻すばみにしゃべる優理が無性に可愛く感じた。

「はいはい、そういうことにしといてあげる」

「だから違つてえ。それより！ 椎奈はいないの？ 好きな人」

「いないよ。誰かを好きになれるほど知らないし」

「ええ」

今日の課題であるプリントを消化するために席に着くと、すぐに優理もこつちに来て次の話題に入る。優理という話題は尽きない次から次へと話が変わって、どんな小さなことでも優理にかかれれば面白く変わってしまう。

同年代の女子が何人かで集まれば、この話題転換のペースと話のバリエイションはそれほど珍しいものではないが、今まで自信を持つて「友達」といえる人間がいなかった椎奈には新鮮な感覚だった。話しているのはほとんどが優理で、椎名はどんどん進んでいく話についていくのが精一杯だったりするが。

新作のお菓子、クラスの子の噂、先生の失敗談まで、どこで聞いてきたんだろうと思うような話もある。そんな中で、優理が今一番気になる話題は夏祭りらしい。

「三日後じゃん。夏祭り。ねえ、一緒に行こうよ」

「三日後だと……八日？ その日は補修もないし、行きたいな。い

い？」

「あたしから誘ったんだよ。いいに決まってるじゃん。八日ってさ、夏休みが始まって丁度二週間なの。つ・ま・り。あたしたちが友達になって丁度二週間！ お祭りに行きがてらお祝いしよ」

友達になって二週間。小さなことだけど、その日を優理と一緒にすごせる。断る理由なんて欠片も、微塵も見当たらないよ。

「ねえ、優理。私たちって、友達、でいいんだよね？」

優理も友達って思ってくれていたことが嬉しくて、でも私には実感がわかないことで変な事を聞いてしまった。でも、仕方ないんだよ。自信がないんだもん。自分は優理の友達だつて言う自信が。

「あつたりまえじゃん」

優理は一遍の曇りもなく応えてくれた。

「本当？ 本当に??」

私が何度も繰り返し聞くもんだから、とうとう優理はお腹を抱えて笑い出してしまった。それもなかなか止まることがない。

「優理、結構失礼だよ」

「ごつ、ごめん。だって……ははっ、椎奈可笑し、くらい……あははは、必死なんだも……」

やっぱりなかなか笑いやんでくれなくて、終いには頭をぺしぺし叩かれた。

「いいーたぁーいいー」

大して痛くないくせに、ふざけて大げさに訴える。

ひとしきり笑った後に、さらに嬉しい提案を優理はくれた。

「浴衣で行こうよ」

でも、私は浴衣なんて持ってない。実はお祭りも、家族で花火を見る程度しか行ったことがなかった。それを聞くと優理はだったら尚更だよ、といって明日一緒に浴衣を買いに行こうという約束まで作ってくれた。

「わかった。約束ね。私センスないから、優理が選んでよ」

「オーケイ。あたしにまっかせなさい！」

ぐいと胸をそらせて浴衣選びを引き受けてくれた。

それから十分ぐらい話をしていると、今日は来ないんだなあと
思っていた先生が突然現れた。

「あ、センサー。こんにちは」

優理が来ている時に先生に出くわすのも、毎日のように来てい
れば初めてではなく、先生も慣れた様にあしらう。

「水貴、またいたのか。お前もちよつとは勉強しろよ。宿題終わ
ったのか」

そのまま先生も交えて三人で、私は勉強しながらもくだらない話
をして、今日の補修を終えた。

補習が終わったのはお昼の時間を少し過ぎた頃だった。

「どこかでお昼食べて帰らない？」

「うん、いいね」

二人そろって外靴に履き替えて、校舎を出る。途中私が自分の靴
紐を踏んでしまい、結び直すのを待ってもらった。そうしてもう一
度歩き出すと、部活を終えたのであろう生徒の姿がちらほら見えた。
その中に岩崎の姿もあった。

私は「あ、岩崎だよ」と言って優理をからかってやろうとしたが、
それよりも早く優理は私の後ろに隠れてしまった。

岩崎は同じ部活のメンバー数人と話しながら歩いていた。しかし
こちらに気づくとなんと、彼らと別れてこっちに走ってきた。

「よう！ 水貴。何かくれてんだあ、そんなに俺と会うのがいやか
よー」

岩崎は顔見知りの優理に挨拶した後にくつちを向いてニイと笑っ
た。

「宮都、だよな。ほとんどはじめましてか。水貴と仲良いわけ？
意外な組み合わせだな。」

初めて近くで見た岩崎は背が高く短髪が良く似合っている日に

焼けた肌がとても好印象な男子だった。しかも私の名前を知っていた。まったく話したことのない私にも挨拶してくれたし。私の中ではかなり好印象だった。

優理、面白いじゃん。告白しちゃえば？　なんて伝わらないのを承知で後ろの優理に目で訴えてみたら理解したのか無理無理と首を大きく横に振られてしまった。そんなに否定することないじゃん。まったく前に出てこようとしないうちに見かねて私が軽く挨拶を交わしてその場をしのぐ事にした。

「はじめまして、って言うのも変ですよ。知ってはいると思うけど、宮都椎奈です。二学期はできるだけ学校に来たいんで、そしたらよろしく」

「おう、よろしくな。これから帰り？　一緒にしてもいい？　椎奈ちゃんとの親睦の意味も込めて」

な？　と手を合わせて頼まれた。調子がいい人だなあ。でも、明るくて話しやすい。優理が好きになるのもうなずける。と言っても私が好きになることはないかな。友達の好きな人、ってわかったら私の中では恋愛対象には入らない。

「これから二人でどこかでお昼にしようかって行ってたところなの。良かったら一緒にどう？　ね、優理」

突然話をふられてか、それとも急な一緒にお昼と言う話にか優理は顔を真っ赤にして目を大きく見開いた。散々違うっていつてたけどわかりやすいなあ。

「べつ、別にいいけど……岩崎！　あたしと椎奈の邪魔しないでよっ！」

どちらかと言ったならば邪魔者は私なきもする。素直になれない椎奈の言動が可愛くてクスクスと笑ってしまったらば睨まれた。そんな赤い顔で睨まれてもちっとも怖くないよ。

「あはは、優理だけ除け者にしてやる。いこーぜ」

「あ、待って！　ほら優理早く！」

「うん。うん！　今行くー」

追いついた優理の背中を押して前に行かせて私は一歩後ろを歩く。
「なんで！」って顔で優理がこっちを見てくるけどスルー。

それから、私は買い食いなんてしたことないから何を食べるかは二人に任せて学校からそんなに遠くないお店に入った。

ジャンクフードを食べるのも凄く久しぶりかも。お母さんが私の体調を気にしてバランスを考えた食事ばかりだったから。

大きく口を開けてハンバーガーにかぶりつく岩崎とちよつとづつ食べてる優理を見比べて、男子と女子って食べ方もかなり違うんだなんて思いながらアイステイーを飲む。

こうしてみると、私って何でもないようなことを何も知らないんだな。こんなこと普通に暮らしてたら今さら実感することじゃないのに。そう気づいたら少し悲しくなったけど、それ以上に今は皆と同じように過ごせている喜びを感じた。

食べ終わった後は二人に誘われてゲームセンターに行った。

学校帰りにいいのかなとも思ったけれど、それは中学生の考え方なのかもしれない。私たち以外にも高校生はたくさんいたけれど、やっぱり悪いことをしているような気がした私はまだまだ子供だ。

何個か私もゲームをしたけど、凄く下手だ。優理と岩崎は私とは正反対にどのゲームをやってもかなり上手い。

「椎奈は考えてやりすぎなんじゃないのー」

「ま、慣れだよな。椎名ちゃんはこのいうのやらなさうだし」

ゲームをし始めた二人の息はぴったりだった。熱くなると照れよりもそつちが勝つんだね、優理は。そうこそつと耳打ちしたら真っ赤になって怒られた。でもその表情は笑顔で楽しそうだった。

「そろそろ帰るかー」

「そうだね。二時間も遊び続けたら疲れないの？ 二人とも」

「へーき！」

あまりにぴったりで応えるもんだから、私は笑い出してしまった。すると優理と岩崎も顔を見合わせて笑い出した。

昨日遊びつかれたのか、起きたのは8時を過ぎていた。

優理との待ち合わせは10時。まだまだ余裕がある。仕事に出たお母さんの書置きを読みながら自分で作った簡素な朝食を取り、自室に戻って着ていく洋服を選ぶ。椎奈はあまり服装などを気にかけないほうだが友達と出かけるとなるといつもよりも意識して考えてしまう。

（だって変な格好で笑われたくないもん）

たっぷり20分かけて決めた服は白いTシャツに小花柄のワンピース。着替えた後に髪を低い位置で二つに結んでチェックの鞆を持つ。

（財布持ったー、時計持ったー……よし、忘れ物なし！）

玄関で鍵を閉めたことを確認して待ち合わせ場所に10分ぐらい余裕を持ってつくように出発する。

今日は優理と一緒に買い物して、昨日は邪魔だったわけじゃないけど岩崎が着ちゃったから今度こそ二人でお昼にして、そう考えていると足取りはかなり軽くなり、予定よりも5分早く待ち合わせ場所に着いた。

待ち合わせ場所は買い物をする予定のデパートの前にある広場だ。小さな子供を連れた家族や、数人固まって笑いあっている学生の姿が多く見れる。それを見てようやく今は夏休み中なんだという実感がわいてきた。

近くにあつたベンチに座り、携帯をいじるふりをしながらきよきよと周りを見ること7、8分。小走りでこっちに走ってくる姿があつた。

「しーいなーあ！ おはよ。早いねえ」

「おはよう、優理。もっと遅く来ると思った」

「そんなに時間にルーズじゃないよー。酷いな」

店の中に入ると外のような蒸し暑さは感じられず、クーラーの人工的で心地いいと言いがたい冷たさがひやりと肌を撫でた。

まだお盆には早いがこころ辺のお祭りは全国的にも有名なもので、

すでに通常よりも多くの人が行きかっている。

「行こう。椎奈迷子にならないでね」

「子供じゃないんだからさあ。優理こそ気をつけなよ」

浴衣は夏祭りシーズンと言うことで特設ブースにずらっと並べられていた。浴衣以外にも甚平や下駄や髪飾り、帯などが綺麗に展示されている。商品の宣伝のためか店員さんも浴衣姿だ。

「椎奈は黒とかかなあ」

何着も出して、見て、引っ込めて、出して、見て、と繰り返している優理はとても楽しそうだ。私はその横で眺めているだけである。「うん、これだ！」

時間をかけて、途中くだらない雑談も交えながら、優理が選んだのは最初に言ったとおりの黒地で、青い大ぶりの花が華やかに描かれている。

レジに持っていったって会計を済ませると早々にやることなくってしまった。

「これからどうするー？」

「何にも考えてなかったや」

ふらふらと目的もなしにデパート内を歩いていると、面白いものを見つけた。それがあつたのは軽い食事が取れるようにたこ焼きや焼きそばなんかが売っている所だ。

『夏季限定！ カキ氷、キムチ味』

キャッチコピーのしたには氷の上にキムチがこんもりと盛られた写真。

「うわっ、なにあれ」

「気になるけど食べるのは怖いね」

でもどこかの地域ではバターソフトとかわさびソフトとかあるし……カキ氷にキムチがのっけていても問題ないのだろうか。でも、ソフトクリームとカキ氷じゃ結構違うしなあ。

「合うのかな？ 氷とキムチ」

丁度私が考えていたことを優理が口に出して言った。

「夏場って辛いものおいしいよね。カキ氷もおいしいし、意外といけたりして」

「食べてみよつか？ 時間に余裕もあることだし」

おいしくない可能性のほうが心の中では大きく、二人で一個ずつ食べる気には慣れなかったから謎のキムチ氷を一つ買い、駄目だったときの口直し用に紅茶味のカキ氷も一つ買った。

「いい？ いっせーので食べるよ。フライングも、食べないのも無しね」

「オツケイ。じゃあいくよ」

顔を見合わせて、同時に大きく息を吸う。

「「いっせーのーでっ」「」

ぱくっ

「ん〜？」

「不味くはないんだけど……」

口の中で辛さがぶわっと広がる。でも冷たい。

不味くはない。夏には嬉しい辛さと冷たさのコラボ。おいしいといえなくもない。でも、どちらかと言うと私たちが求めていたのはなにこれ〜ってなるような味。それを想定しての紅茶味だったのに。

「普通にいける。けど面白くはない」

「確かに」

なんとも微妙な結果だった。

なんとなくだらだらと歩くだけで一日を終えたが、時間を無駄にした感じはまったく感じない。それだけの充実感と楽しさを感じたのだ。帰り際に、「また、明日教室でね」と優理に言われるまで明日の補修の存在を綺麗さっぱり忘れていたくらいだ。

今日もからつと晴れていい天気だ。昨日一日はしゃいだから多少の疲れは体に残っているものの気分は爽快。夏休みに入ってから体調も崩れていない。

少し早く教室に着いた椎奈はすでに机の上に置かれていたプリントに取り掛かる。

そろりと教室の扉が開かれてそちらを向く。「おはよう、優理」

と言いかけたが口にしないで正解だ。入って来たのは岩崎亮だった。

「岩崎おはよう」

「おう」

「どうしたの？ 部活だったら外だね。教室に何か置いてた？」

「んにゃ、俺成績悪いから部活ない日は補習来いって言われてたんだよ。忘れてただけだな」

ようやく思い出して今日来たって言うことか。

「私以外にも補習の人いたんだ。ちよつと安心。一人じゃ寂しいもん。でも優理がいたからそうは感じなかったかな」

岩崎が補習と言うことは彼がいる日は優理と岩崎と私で大概は三人で教室にいることになるだろう。優理にとっては嬉しい知らせだろう。私にとっては……優理にとって嬉しいんだから嬉しいかな。

「うっわ、なにこれ。むずかしっ」

プリントを見てシャーペンを出してから岩崎の手はペンを回す以外のことをしていない。

こっそり除いてみると遅れている私でも解ける。随分苦手なんだなあ。

「そこ、この公式使えばいいんだよ」

身を持ち出して自分のノートを見せる。

「え？ どれどれ。椎奈ちゃんのノート見やすいな。字、綺麗だし。

……あつ、解けた。すげー。サンキュ」

こつを掴めばできるタイプなんだろう。それから、何回か解き方を効いてきたがそれだけですらすらと解いていた。苦手なんじゃないってやらないんだね、岩崎は。

「うーん、やんないっていうかやる暇ない。俺はサッカー命だし？」
どうやら無意識に声に出ていたらしく岩崎は私の思考に対して答えてくれた。

「そっか。上手だもんね」

「椎奈ちゃんって俺がサッカーしてるとこ見たことあるの？」

「うん。この教室から良く見えるんだよ。優理と凄いね、って言いながら見てた」

するとはにかむように笑って「サンキュ」と照れから小さな声で言われた。

岩崎との会話は思っていたよりも楽しかった。きっと岩崎の性格のおかげだろう。人懐こい性格はこっちが緊張するすきを与えてくれない。うまい具合に、自然に次の言葉を引き出してくる。

（優理遅いな。部活長引いてるのかな）

この会話の中に優理が加わるのを楽しみにしながら私は岩崎と言葉を交わす。

一度扉がノックされて優理だと期待して返事をしたがそれは今日は補習につけないと言う先生の伝言だった。

結局優理は教室には来なかったんだ。

その理由なんて私にはわからなかった。

明日はもう夏祭りなのに。

待ちに待った夏祭り。なのになんにもやもやとしたわだかまりがたまっていた。せつかく選んでもらった浴衣を着てきたと言うのに

気分がまったく浮上せずに表情も暗い。今日も優理は来ないんじゃないか。そんな不安がよぎる。

つい、余計に早く待ち合わせ場所に来てしまった。

10分待ち、20分待ち、待ち合わせの時間を過ぎて、また10分。

不安は現実へと移り変わっていた。

何かあったんだろうか。来る途中に自己にあったとか……考え出すときがない。気分と共に顔も下を向いてきたとき、聞き覚えはあるがまだなじみは深くない低い声がした。

「椎奈ちゃん一人？」

岩崎だった。少し離れた所にもう数人男子がいるが、なにやら目配せをして笑い合いながら立ち去って言った。

「優理を待つてるんだけど、ぜんぜん来なくて……」

「え、優理？ さっき俺学校に入って句の見たんだけど」

「学校？」

岩崎は無言でこくりと頷く。それから何か言いたげに視線を泳がせてたつぷり時間を取りやつと口をあけた。でも私はそんな様子にすら気づかずにして優理が来ないのか、どうして学校に行つたのか考える。

「あのさ、椎奈ちゃん。よかったら一緒に「ごめん、用事で来た！ 教えてくれてありがとうね」

結果的に岩崎がしゃべろうとしていたのをさえぎる形で叫び走り出す。後ろのほうで状況が飲み込めずどもる声があったが無視。さえぎってしまったのは本当に結果で、私には回りを考える余裕なんてなかった。

どうして、なんていくら考えても浮かばない。だったら本人に聞くまでだ。

浴衣は足が大きく動かせないから走りにくい。元から間違っても速いなんていえない足だから余計に時間を食う。暗くなり始めていて足元が見えないので尚の事だ。

最初からちよつと屋台を見て回つたら花火の時間になるように待ち合わせていた。学校に着く頃には花火開始まで何分か両の手の指で数えられるくらいの時間になっていた。

（校門閉まつてたらどうしよう）

その時は不法侵入でもする位の気持ちでいたがその必要はなかった。校地内に入つてすぐに、いつも補習している私たちの教室に駆け込む。

教室のドアは開いていた。「え」と声を漏らしながら驚いた表情の優理がそこにいた。

「優理っ」

荒い息の合間になんとか出た言葉は大事な友達の名前だけだった。

「……見つかつちゃった」

優理がおどけた口調で言う。

私は優理が立っている窓際まで駆け寄つて、それから息を整える。

「駄目だよ。椎奈は体弱いんだから無理しちゃ」

その言葉がなんだか他人行儀に感じて不安が募る。

「なんつ……で、来て、くれなかつたの？」

本当は泣きそうで言葉が詰まるのをまだ息が切れている振りをし
てごまかす。

「椎奈は悪くないんだよー。あたしの勝手な理由だから」

自嘲気味に笑つて、それ以上は何も言わない。

「勝手でもいいから、教えてよ」

優理は私をじつと見つめて溜息をついた。

「勝てないなあ、椎奈には。一生懸命で、可愛くつて、当然なのかもね」

「何の話？」

「昨日、教室で岩崎としゃべつてたでしょう？ あたしそれ聞いてたんだよね。それ見て、岩崎凄く楽しそうでさ。気づいちゃったんだよね。ああ、岩崎は椎奈がすきなんだなつて。だから、凄く自分勝手な嫉妬。今日行かなかつたのは椎奈に会うのが一方的に気まず

「かつただけ」

随分悩まされた割には優理があっけらかんと話すもんだから拍子抜けしてしまった。

「私は、岩崎より優理のことが好きだよ？」

思ったことを率直に言ったらば、豆鉄砲でも食らったような顔をされた。

「あれ、あれ？　なんか変だった？」

「はははっ。ホント適わない。可愛すぎるよ。あたしも椎奈大好き」よく分からないが笑いやまない優理につられて私の口からも笑い声がこぼれる。二つの明るい声の中、ドーンと重くてお腹に響く音がした。

「あ、花火始まっちゃった」

「あたし浴衣着てないけどさ、今から着替えに行く時間もないしここで見よう。結構この学校って穴場なんだよ」

「うん。すごい綺麗」

花火に見入っていると優理が視線を花火に向けたまま呟いた。

「あたしさ、亮のこと好きだよ」

「知ってる」

軽い笑いに乗せてそういうと真剣な目で見られて笑いやむ。

「でも、やっぱり椎奈のほうがもっと好き。恋愛より友情派なんだなあ、あたし。てか、恋愛向いてないかも。二人に何かあったら絶対椎奈のほうに行っちゃう」

私たち以外誰もいない夏休み真っ只中の教室で、お互いの顔を見つめて静かに笑いあった。

「「来年も、一緒に見ようね」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233u/>

空っぽの教室

2011年6月24日17時55分発行